

## 一五年戦争末期の雑誌 (一)

— 朝日新聞社刊『週刊少国民』 —

山 本 明

## (一) はじめに

一五年戦争は、明治いらいの天皇神性思想の日本が世界に冠たる国体の国であること、日本は正義の国であり、また強国であることなどの考えを国民に植えつけた結果として戦われた。そうした考えは、昭和初期には、すでに学校教育、社会教育はもろろんあらゆる機会に国民に教えこまれ、それがこの島国の「常識」にまでなっていた。こうした欺瞞が徹底的に強化されたのは、林内閣の祭政一致、そして一九三七年の日中全面戦争開始を経て一九四〇年の「紀元二千六〇〇年祝典」を頂点としている。

一九四一年になると、日中全面戦争四年目になり、当時は「支那事変」と称していたものの、底なし沼の戦争であり、その戦争から脱出するために、対米英戦争に突入しなければならなかったのである。一九四一年には、政府は小学校を国民学校に改編して、

義務教育を全面的に戦争体制に改編し、出版も統制によって、内容、形式ともに、完全な戦時体制に組み入れた。

私は、ここで、一五年戦争下の雑誌を、主として、一九四一年一月八日にはじまる太平洋戦争下の雑誌を対象とすることで、日本の絶対主義的天皇制イデオロギーが、それ自身の矛盾を露呈する姿を明らかにしておきたい。とくに、一九四四年六月のマリアナ沖海戦、サイパン失陥をきっかけにして、その年一〇月の米軍のレイテ島上陸作戦にたいする特攻作戦の開始、翌四五年の内陸空襲、沖縄戦によって国民の生活がとたんの苦しみにおちいると、上からの天皇制イデオロギーのしめつけは強くなるが、他方では、イデオロギーと生活の矛盾があちこちで露呈する。その矛盾を、雑誌によって追跡することが、本稿の目的である。したがって、本稿は、一五年戦争末期の雑誌、とくに一九四四年、四五年の雑誌に照準をおくことにする。

ところで、雑誌を研究対象とする場合、そのイデオロギーや雑誌の影響などを明らかにする必要がある。それを、いま仮に読者論と名付けておこう。<sup>(1)</sup>

読者論はジャーナリズム論ないしマス・コミュニケーション論の中で、もっとも弱い部分である。とくに、歴史的研究では、その方法論すら確立されていない。所与の新聞、雑誌の読者の大ざっぱな社会層の研究は端についてはいるものの、ジャーナリズムの内容と読者との対応の仕方には、手がつけられていない。<sup>(2)</sup>

本稿では、こうした課題にせまることを一つの目的とした。幸か不幸か、一五年戦争末期の雑誌は言論統制と用紙不足によって、その数はいちぢるしく少なくなっている。一九四四年末の時点をとれば、少年少女むぎのマス・メディアは日刊新聞一紙、週刊誌一誌、月刊誌七誌（少年倶楽部、「少女倶楽部」、「少女の友」、「日本少女」、「海軍」、「若桜」、「少国民の友」）にすぎず、頁数も数十頁とまじりである。

こういう時期に、それらがよく読まれたことは容易に想像できるが、その読まれ方を調べるためには、質問票配布による統計的調査は不可能だから、さしあたり、私自身とその知人との体験を下敷にして、読者論構築の一里塚としようと考えた。こうした方法は、一見、非科学的で恣意的であることは言うまでもない。しかし、所与の雑誌を、現時点の観点、価値感で切りきざむ方法は、一見、科学的に見えて、じつは死体解剖にすぎないのであって、細胞は死んでいる。今日、流行の記号論的研究のあるものは、ま

ず第一に歴史性を無視し、第二に、テキストという名の死体を切りきざみ、第三に、読者を除外することで、一見学問的方法に見えるながら、実はそうではない。しかし、こうした方法がいま脚光をあびる理由は、第一に、イデオロギー・価値観を捨象できることが没イデオロギー的イデオロギー時代にうまく対応していること、第二に、歴史は再現できないということ、自明の理として

いることによって、多くの人たちをとりえているのである。本稿では、雑誌とその読者の生きた関係をとりえるために、さしあたり、私とその知人の読者経験を叙述するという、一見非科学的かつ文学的方法を採用することにした。この執筆の過程で、本稿で紹介した若干のエピソードを、社会心理学ないしコミュニケーション理論の概念で説明したい誘惑にかられたが、私はそれをかろうじて禁欲した。中途半端な理論化は、説明の論理にすぎず、小賢しいだけだと考えたからである。したがって、本稿には、自分史的側面が強すぎて、私自身も不満な部分があることは否定できないが、あえて、このままにした。理論化への努力は、次の課題にのこして、今回は、読者論構築の半歩としたい。<sup>(3)</sup>

注

(1) 読者論の理論化への試みは、山本武利『近代日本の新聞読者層』（法政大学出版局、一九八一年刊）の第一部「新聞読者層研究序説」が大いに参考になる。

(2) 戦時下の少年少女雑誌の廃刊・統合については、関英雄「太平洋戦争下の児童雑誌統合」（『日本児童文学』一九六九年一月号所収）に

## 一 五年戦争末期の雑誌 (一)

概観がある。

(3) 戦時下の雑誌のアウト・ラインと、私の採用した方法については、高崎隆治『戦時下の雑誌——その光と影』(風媒社、一九七七年刊)参照。また、歴史と自分史のかかわりについては、高崎隆治『非戦のうた』(日本評論社、一九八三年刊)に教えられた。

### (二) 「僕らは昭和の少国民だ」——一九四二年度

『週刊少国民』は、一九四二年五月一七日に創刊号が発行されたB4版のグラフィ誌である。一九四四年四月一六日号(第三卷第一五号・通巻九九号)で、B5版の週刊誌型になった。この時、グラフィ誌ではなくなったが、一九四五年八月五日号まで週刊を維持した、敗戦とともに隔週刊となり、一九四六年一〇月一日号で、『週刊少国民』は『こども朝日』に改称したのである。約四年五か月の生命であった。創刊の辞を、書きうつしておく。

「週刊少国民は 大東亜戦争をやり遂げ、世界にますます雄飛する日本帝国を、これから背負って行くのは皆さんであるという考えを本にして、つくられて行きます。週刊少国民は 皆さんが知っておらねばならないニュースをよくえらび、日本はどう進んでいるか、世界にはどんな事が起きているか、はっきりわかるようにします。週刊少国民は もちろん、大東亜の戦争ニュースに力をいれます。この大戦争の毎日のニュースは、



1942年5月17日  
創刊号



1942年12月6日号



1942年8月2日号

歴史の新しい一章であります。これを正確に知ることは、生きた歴史を読むのと同じであります。週刊少国民は 皆さんの科学知識の養成に力を入れます。国の内外の動きを今からよく知り、すべてのことに科学的知識を持つことが、ほんとうにえらい国民となる条件だとも思います。週刊少国民は 学校にいる皆さん、工場や農地や家族で雄々しく働いている皆さんのおじさんとなり、たのしい友達となり、時には先生にもなりたいと思います。」

当時、朝日新聞社は『週刊少国民』を創刊するために、『アサヒカメラ』を廃刊しなければならなかった。用紙の配給制のため、新雑誌を創刊するためには、他誌の廃刊が必要なのであった。たとえば、一九四四年五月、大日本雄弁会講談社が、陸軍、海軍の全面的バックアップによって少年兵徴募のための雑誌『若桜』と『海軍』を創刊したときも、代りに『幼年倶楽部』と『コードモエパンシ』を廃刊にしなければならなかったのである。

さて、『週刊少国民』は、先に引用した「創刊の言葉」から分るように、「大東亜戦争をやり遂げ、世界にますます雄飛する日本帝国を、これから背負って行くのは皆さんであるという考え」を基本にし、次に「日本はどう進んでいるか、世界にはどんな事が起きているか」のニュースや、「大東亜戦争のニュース」を掲載するとともに、「科学知識の養成に力を入れたい」とのべる。これだけを読むと、けっして好戦的な雑誌ではない。この編集方針は、じつのところ、内務省警保局図書課が一九三八年一月二六・七日に出発業者と編集者を出頭させて手渡した「児童読物改善に関する指導要綱」にもとづいている。この「要綱」は、内務省が民間有識者の意見をきくための諮問機関を通じて作製したものであった。きわめて重要な文書だから、全文を掲げておこう。

### 児童読物改善ニ関スル指示要綱

(昭和十三年一月)

内務省警保局図書課

#### 〔廃止スベキ事項〕

#### 一、活字

- (1) 六号及ビ八ポイント以下ノ活字ノ使用——但シ幼児向ノモノニアリテハ十二ポイント以上タルコト
  - (2) 振仮名ノ使用——但シ特殊ノモノ、固有名詞ハコノ限りニ非ズ
- (注意)

一五年戦争末期の雑誌(一)

(イ) 右ノ廃止ニ因リ行間ヲ詰メルコトナキヤウ注意スルコト

(ロ) 色刷ノ上ニ印刷スル場合ニ於テハ特ニ活字ノ大キサ、色彩ノ配合ヲ注意スルコト

#### 一、懸賞

何等実質的内容ヲ有セス、専ラ営業政策上ニ利用セルモノ

#### 一、広告

- (1) 誇大ナル自家広告ノ掲載
- (2) 宮家献上又ハ御買上ノ記事ノ掲載
- (3) 顧問、賛助員ノ列記
- (4) 誇大ナル予告ノ掲載

(イ) 次号予告

(ロ) 連載予告 等

一、附録(オマケ)——但シ正月号ヲ除ク

一、卑猥ナル挿画

一、卑猥俗悪ナル漫画及ビ用語——亦本漫画及ビコノ種程度ノモノ一切

一、極端ニ粗悪ナル絵本——実物ト余リニカケ離レタルモノ、余リニ粗悪ナル色彩ノモノ等

一、内容ノ野卑、陰慘、猥奇のニ渉ル読物

一、過度ニ感傷的ナルモノ、病的ナルモノ

其ノ他小説ノ恋愛描写ハ回避シ、「駆け落ち者」等ノ言葉ハ少年少女ノ小説ヨリ排スルコト

一 五年戦争末期の雑誌 (一)

〔編輯上ノ注意事項〕

一、教訓タラズシテ教育的タルコト

一、年齢ニ依リソノ教化及用語ノ程度ヲ考慮スルコト

(1) 五、六歳前後ノモノ

(イ) 絵ハ極メテ健全ナルモノタルコト

(ロ) 童話ハ題材ヲ自然ノ凡ユルモノニ求メテ創造的ニ

シテ詩情豊カナルモノ

特ニ母性愛ノ現ハレタルモノタルコト

十歳以上ノモノ

将来ノ人格ノ基礎ガ作ラレル最モ大切ナル時代ナルヲ

以テ、敬神、忠孝、奉仕、正直、誠実、謙讓、勇氣、

愛情等ノ日本精神ノ確立ニ資スルモノタルコト

又生産ノ知識、科学知識ヲ与ヘルモノヲ取入レルコト

(2) 用語ハ年齢ニ従ツテ漢字ヲ用ヒ、教科書ノ範圍ヲ出デザ

ルコト

編輯ノ單純化ヲ計ルコト―例ヘバ活字ノ配合、色彩ノ單

純化、記事面ト広告面ノ区別等

一、掲載記事ニ対シテ比例制度ヲ確立スルコト―漫画、小説、

記事等ノ割合

一、仮作物語ヲ制限スルコト―現在ノ半数以下ニ減ジ、且ツソ

ノ仮作物語中ノ時代小説ノ幾篇カラ小国民ノ生活ニ近イ物語

又ハ日本国民史ヨリノ建設的ナル部分ニ取材セルモノト代ヘ

又冒險小説ノ幾篇カラ探險譚、発見譚ノ如キモノニ代ヘルコ

トヲ考慮スルコト

尚コノ減頁ニ依ツテ得タル頁ヲ左ノ如キ記事ニ充ツルコト

(イ) 科学的知識ニ関スルモノ―従来ノ自然科学ソノモノ

モノヲ興味深ク述べタルモノ以外ニ科学的知識ヲ啓発

スル芸術作品ヲ取上グルコト(例ヘバ、爆彈、タンク、

飛行機等ノ如キモノニシテモ、ソレ等ノモノノ持つ機

能ヤ本質ニ触レ得ルテーマノモトニ取扱フコト)

以上ノ他、地理、風俗ニ関スルモノヲ取入ルルコト

(ロ) 歴史的知識ニ関スルモノ―忠臣、孝子、節婦等ノ伝

記等ノハモトヨリ国民全体又ハ一ツノ集團ノ困難、奮

闘、發展等ヲ叙シタルモノ、即チ国民史的記事ヲ取上

グルコト

(ハ) 古典ヲ平易ニ解説セルモノヲ取上グルコト―但シ兒

童ノ読物ニ適スルモノタルコト

一、漫画ノ量ヲ減ズルコト―特ニ長篇漫画ヲ減ズルコト

一、記事ハ可及的ニ専門家ヲ動員スルコト―科学記事ハ科学者

ニ、基礎的經濟思想(經濟知識ニ非ズ)ハ經濟学者、実業家

ニ等

一、華美ナル消費面ノ偏重ヲ避け、生産面、文化ノ活躍面ヲ取

入ルルコト

一、子供ノ質疑ヲ本格的ニ取扱ヒ生活化スル工夫ヲ計ルコト

一、幼年雜誌及ビ絵本ニ「母ノ頁」ヲ設ケ、「読ませ方」「読

んだ後の指導法」等ヲ解説スルコト

一、事変記事ノ扱ヒ方ハ、単ニ戦争美談ノミナラズ、例ヘバ「支那の子供は如何なる遊びをするか」「支那の子供は如何なるおやつを喰べるか」等支那ノ子供ノ生活ニ関スルモノ又ハ支那ノ風物ニ関スルモノ等子供ノ関心ノ対象トナルベキモノヲ取上げ、子供ニ支那ニ関スル知識ヲ与へ、以テ日支ノ提携ヲ積極的ニ強調スルヤウ取計ラフコト。従ッテ皇軍ノ勇猛果敢ナルコト強調スルノ余リ支那兵ヲ非常識ニ戯画化シ、或ハ敵愾心ヲ凌ルノ余リ支那人ヲ侮辱スル所謂「チャンコロ」等ニ類スル言葉ヲ使用スルコトハ一切排スルコト

一、挿画漫画ニハ責任者ノ名ヲ明記スルコト

以上ハ子供雑誌ヲ基礎トシテ立案セルモノナルガ、単行本、漫画専門雑誌ニ就テモ右ノ方針ニ準ジテ取扱フコト

一読して分るるようにや芸術的な児童文学を擁護し、後押しすること『少年倶楽部』や『譚海』に連載された冒険小説・探偵小説、軍事SF小説などを否定する役割を果たしたのであった。その結果、「俗悪児童読者の横行はおさえられ、良心的な文化性の高いものに進出の道が与えられたことは確かである。冬の季節にたえてきた芸術的な児童文学に、ようやく陽春がめぐってきたと思われた。童話作家のなかには、ストックをはたいても追いつかぬほどインフレ景気に恵まれた人も出るありさまであった」（菅忠道『日本の児童文学』）とあるが、日中全面戦争開始後の、「冬」の時代に、児童文学だけが「陽春がめぐってきた」という認識が

一五年戦争末期の雑誌(一)

ゆがんでいることは、言うまでもなからう。鳥越信は、菅忠道の文章を引用したあとで、次のように書いている。「雑誌『少年倶楽部』などに押されて息もたええなかった芸術的児童文学は、ここに來て一気にルネッサンスの花盛りを迎えた。(中略)しかし、このような花盛りも、しよせんは権力の温室に咲いた一時的な徒花にしかすぎなかった。軍国主義にとつて、真の狙いは日本子どもたちを肉弾として戦争に狩りだすことだったから、時とともに本音が露骨となり、一九四三年あたりからは、真接戦意を昂揚する読物以外は出せなくなり、やがてそれも資材の不足によって、完全に息の根をとめられてしまった」（鳥越信「戦時下の児童文学」『国文学・解釈と鑑賞』一九八三年八月号所収）と言われている。

こうした見解は、数多くの児童文学論のいたるところに見出すことができる。しかし、私はこうした見解に異議を申し立てたい。その理由は、まず第一に、児童読物についての当時の児童の感想が全く語られないことである。つまり、読者論抜きで戦時下のことを語っても、なにもならぬ。第二に、私はここで「児童読物」と書いたけれど、いわゆる児童文学は、児童読物の一部にすぎないのであって、その逆ではけっしてない。第三に、「一九四三年あたりからは、直接戦意を昂揚する読物以外は出せなくなり」というのは、厳密に言えば事実<sup>(1)</sup>に反する。

こうした異議申し立てを、とりあえず「週刊少国民」を紹介し、論じる中で、ふれてゆきたい。そのために、同誌の内容を紹介し、

一 五年戦争末期の雑誌 (一)

分析するとともに、当時の「少国民」がどのようにこの雑誌を講読し、読んでいたのかを、自身を一つのモデルにしてふれることで、この雑誌の読者論に接近したい。幸いなことに、私は同誌の創刊号から一九四五年一〇月頃までの愛読者であった。創刊号の時は、神戸に住んでいて国民学校初等科四年生であり、一九四五年一〇月は、疎開地の(旧制)中学一年生であった。また、現在の同世代の友人たちの中にも、戦時中、『週刊少国民』の愛読者が何人もいて、彼らの経験をきくことができた。

こうして、『週刊少国民』が、当時の少年たちにとって読まれたか、それは状況の中でどういう役割を果たしたかを不十分ながらもらかにすることが出来る。

さて、とりあえず、創刊号の目次を紹介しよう。

表紙「働く少年戦士」

(東京飛行機製作所にて)

創刊の言葉

ばんざい、ばんざいこの大戦果

週刊の動き 珊瑚海海戦

少国民諸君の使命 (高橋大将のお話)

手も足も出ぬ米英

珊瑚海とはどんなところか

沈み行く敵航空母艦 松添健宣

進むビルマの皇軍

お玉添子コレヒドールの降参

◇敵艦撃滅日誌

◇撃沈破した主な敵艦

落下傘部隊の勇戦物語

◇精神力を鍛へよ (徳永中尉談)

朝鮮青年もみな兵士

◇安芸ノ海と照国の力くらべ

「山田長政の一生 凶南の鷗」 佐藤春夫 (石井鶴三圖)

東京―ベルリン国際電話・ドイツの少国民はどうしているか

飛行機工場ではたらく少年戦士―国民学校生の見学記

すぐれた和歌 斎藤茂吉

飛行機の心臓・発動機の話 富塚清

◇伝書鳩―地方の дайリ

かわいいマレーの子供 酒井貞吉

チェコレートと兵隊さん 影山正雄

望遠鏡の作り方(やさしい工作) 橋本為次

照明弾(回答) 大谷東平

グラビアのページ

▽詩・僕らは昭和の少国民だ(北原白秋)

▽わが海軍陸戦隊の敵前上陸

▽陥落したコレヒドール要塞

▽まんぐら切抜帖

▽たたかう産業風土記 (静岡の茶)

創刊号の第一ページは、「印度洋のアンダマン島へ勇ましいわが海軍陸戦隊の敵前上陸」の写真とともに、北原白秋の詩「僕は昭和の少国民だ」が掲載されている。

以上で分るように、一流の作家に執筆させていて、さすが朝日新聞社だと思わせる。このあたりが、一流好みの朝日色そのもので、他誌とは、ちがうのである。ただし、記事が一流の執筆者だということと、少年が面白がり、あるいは熱中したということの間に、千里のへだたりがある。とりあえず、巻頭のグラビアをかざる北原白秋の詩の全文を書きうつしておこう。

僕は昭和の少国民だ

僕は昭和の少国民だ。／見る見ろ、時代の少国民を。／太陽―僕らの日章旗、／打ち振り打ち振り行進・進め。まあ、見ろ偉大な東亜の今を。／見る偉大な東亜の今を。／空だ、青空、アジアの空だ／陸だ、大陸、アジアの陸だ。／海だ、大洋アジアの海だ。

清明―僕は正気に生きる。／忠誠―僕は天地に誓ふ。／雄大―僕は四方を望む。／崇高―僕は祖国に殉ずる。／質実―僕は簡素を忍ぶ。／剛健―僕は力を養ふ。／堅忍―僕は苦難に堪へる。／錬成―僕は鍛へて克つのだ。僕は継ぐのだ、鞏固精神。／僕は承ける、祖先の血統。僕

一五年戦争末期の雑誌(一)

らは見て来た、興隆日本。／躍進、躍進、躍進しよう。

僕は飛び立つ翼を張って、／僕は見つけめる、羅針と星を。

／僕は闘ふ、戦車で、銃で、／潜航、爆撃、突進する。

僕は学ばう、日本国史、／国語だ、科学だ、―僕は育つ。

／僕は神話を創造する。／僕は栄と光を思ふ。

僕は文化の使節となる、／僕は資源を開発する。／僕は福祉を増進せしめる。／僕は理想を実現する。

僕は昭和の少国民だ。／見る見ろ、時代の少国民を。／鍛へる鍛へろ、鋼の意志に、／ひらけよ桜と、純なる感情。

子どもには、楽しくも面白くもない。さらに、いま読みかえずと、白秋のような浪漫派の詩人が、こんな詩を作ったことを、いたましく思う、だが、いたましいという言葉は、この雑誌のページをくっていると、すぐに、とりけさねばならない。白秋は、月号、「大東亜戦争少国民詩集」のタイトルで戦争詩を連載している、この年の一月二日に永眠してから後も、「遺稿」と銘打った詩が、一九四二年いっぱい掲載されるのである。

のちに、一九四三年八月、北原白秋の『週刊少国民』掲載詩四五編をおさめた本が刊行された。『大東亜戦争少国民詩集』(朝日新聞社、初版二万部、定価三円)。

『週刊少国民』は、白秋のほか、一九四一年一月二月に発足した日本少国民文化協会の文学者を動員している。この会は、半官半民の団体で、子どもを戦争に巻きこむために大活躍をした。



たとえば、協会の有力メンバーであった与田準一の「詩になつてゐる首相の言葉」(十一月一日号)をみよう。この号の巻頭には白秋の詩「東条さん」が掲載されていて、国会議事堂前を馬で散歩する背広、ソフト帽姿の東条首相の写真つき。与田準一の文章は、次のとおりである。

(前略) 東条首相の早起きは有名だ。毎朝四時ごろにはきまつて目をさまされ、馬に乗って出かけられる、そうして町のいろんな人たちに会うごとに声をかけられる、という文章のなかに、その晩の散歩から帰って家人に語られたという東条首相の言葉があった。わたくしは読んでいて、これは詩だな、と思った。そこで詩のように行を切つて書きうつしてみた。

「若いものはいいねえ、けふも自転車を走らして来た／青年が、／向かうから声をかけたよ、／すれ違いざまに、／お早う御座います、／元気でやってきました、／と挨拶してくれた、／しっかり頼んだぞ、／というと、／大丈夫です、／頑張ります、／と大声で答えて走って行った／……若いものはいいねえ」

文字のつかい方も句読点も新聞記事そのままである。句点の打つてあるところで行をかえたままである。一字一句の飾りもない、心そのままの言葉だ。何でもない言葉だ。それでいて聞きのがしがない言葉だ。疲れを知らぬ健康な首相と決戦下の元氣な青年、そのうるわしい緊張感が朝の光の中に見えうかぶ。

詩はこんなところから顔を出す。諸君も日記がわりに書いてみたまえ。一日の生活をふりかえつてみたまえ。

当時、私たち「少国民」は、東条首相のことを「東条さん」と呼んでいた。親しみの念がこめられていたのである。ただ、戦後になって、一九五〇年頃に「きけわだつみのこえ」を聞いていたら、あるインテリ兵の手紙に、次の文章を発見して、感心した。

一九四二年に入営した大学卒の兵は、次のように書いている。「東条首相という男はひげを生やした浅蜷あさなのような顔をしています。この介殼かひがらのなかで歴史の虹が織られるのです。東条は詩人だということになるのでしょうか。呵々」。

『週刊少国民』が、日本少国民文化協会のメンバーの全面的協力や朝日新聞社の周辺にいる文化人を動員して、内務省の「要綱」を忠実に実践して、これまでの少年雑誌には見られなかった「高級」さをつくりだしたことは、特筆に価する。連載小説タイトルを列挙しておこう。

一九四二年度。佐藤春夫「山田長政の一生・凶南の鵬」、木々高太郎「少年珊瑚島」、大仏次郎「薩英戦争」、火野葦平「真珠艦隊」一九四三年度。石川達三「大いなる朝」、岩田豊雄「浪速艦」、徳永直「五人の子供たち」。一九四四年度。山岡荘八「空の艦長」、大仏次郎「日本海流」、木村荘十「天外魔城」(四年五月まで連載)、一九四五年度。石川達三「大空の五つ星」(子科練の小説だったので、敗戦により連載途中で中止)。

だが、その「高級」さは、少年少女読者にあまり受けなかった。少くとも、私は創刊号から定期購読していたが、さほど、毎週土曜の配達日待ちわびた記憶はない。では、なぜ購読していたかといえ、他に読むものが極端に少なかったからである。一九四二年に私は『少国民新聞』（日刊）を購読し、雑誌は、『少年俱樂部』をとり、他に『海軍雑誌』と銘うった月刊の『海と空』を首を長くして待っていた。『海と空』は大人向きの軍艦、軍用機研究誌であった。だが、私はなにしろ、国民学校初等四年生である。毎日の新聞をすみからすみまで読んでいたわけではないし、『少国民新聞』は、当時でいう「ヨイヨ」の新聞だったから、時事的な報道は「週刊少国民」に依存していたのである。

創刊号で私の目をそばだてたのは、珊瑚海海戦の報道であった。この海戦では、アメリカの戦艦一隻、航空母艦二隻を撃沈し、「わが方は給油船を造りかえた小型航空母艦が一隻沈んだ」とあって、私はそれに注目した。大本営発表にも、そのことは明記してあったのだが、給油船改造空母というものがあるのを知って、私は狂喜したのである。当時、日本海軍が公表していた航空母艦は、全部制式空母ばかり六隻だったからである。

この海戦は、大本営海軍報道部平出英夫大佐が、五月二日に放送講演したように、「これこそ近代海洋戦において初めて起った精鋭な航空母艦群同士の食うか食われるかの一種の決戦であった」のである。たしかに、彼我、遠くはなれた場所から、航空母艦の搭載機を発進させ、大砲も魚雷も打たない史上初の海戦だったのである。

#### 一五年戦争末期の雑誌(一)

たのである。

海戦の様相が変わったことに、日本のジャーナリズムは気がつかなかつた。新聞はもちろん、雑誌も(専門誌『海と空』でさえも)、海戦の変化をとらえることができなかった。『週刊少国民』がそれに気付くのは、一九四四年の夏以後である。(なお、珊瑚海海戦で沈没した「給油船改造小型空母」は、戦後明らかになつたところでは、潜水母艦剣崎改造の空母祥鳳であった。)

この年の『週刊少国民』は、東南アジアの風物、風俗を毎号のようにとりあげている。日本では、長い間、外国といえ、中国や「滿洲」ばかりであったから、東南アジアは、ひんぼんに記事となつた。表紙にも多かつたし、連載小説も火野葦平「真珠艦隊」は、マニラのフィリピン少年の話である。また、アメリカとの交換船浅間丸が帰国して、「敵の少国民の生活」といった記事も多く掲載される。

一九四二年の同誌には、精神訓話はほとんど掲載されていないが、ごく少数の例外は、海軍報道班員の肩書をもつ石川達三の「捕虜の話」(一〇月四日号)である。これは日露戦争のあと、ロシア兵の捕虜たちが喜び勇んで帰国したことをのべて、次のように続ける。

どこの国の戦争でも、戦いが終って平和にかえったとき、捕虜交換ということをやる。即ち両方の国で捕えている捕虜をとりかえて、自分の国の将兵を自分の国へ連れ戻るのである。そ

ういう事については世界各国のあいだで条約ができていて、つかまえた敵の捕虜をどういう風に扱うかということがはっきりきまっている。ところが日本だけはこの捕虜条約に加入していない。条約に加入するのは、自分の国の将兵が敵国に捕えられたとき、敵国のなかであまりひどい目にあわされないように、お互いに約束をしておこうという訳である。しかし日本では、自分の国の将兵が敵国の捕虜になるということはないのだ。捕虜になる前に、力の限り戦って戦死するか、または腹を切って死ぬかである。生きたまま敵の手に捕って恥をさらすという者は日本の軍隊には一人もないのである。したがって捕虜条約に加入することも要らないし、戦争がすんでから捕虜を返してもらおうということもないのである。

(中略)

たとい捕虜になって一時の生命をながらえてみたにしても、戦いが終って平和になったときに、のめめと生れ故郷に帰って来られるだろうか。帰って来て父や母や知人にむかって「只今かえりました」と挨拶することができるものだろうか。

このほか、一月六日号には「岩田・丹羽両先生にきくお話・海軍魂」という座談会がある。国民学校六年生の男女四名と二人の作家の出席である。当時、岩田豊雄(獅子文六の本名)は、朝日新聞朝刊に連載小説「海軍」を連載中で、大評判をとっていた。私でさえも、待ちかねて読んでいた。「海軍」は翌四三年、朝日

文化賞を受けている。この「海軍」によって、岩田は戦時下の代表的作家となり、獅子文六名で『主婦の友』に「おぼあさん」を連載した。丹羽文雄は、四二年の第一次ソロモン海戦に従軍して、「海戦」を書き、翌年、中央公論賞をうけている。こうした二人の「先生」が海軍を語っているのだが、いさましい発言はない。しめくくりには岩田が「皆さんはもういろいろなことが分つてるでしょうから、あとはただ一生懸命にやるといふことです。兵学校の生徒さんに負けないように、しっかりやりましょうね」と言えば、それをうけて丹羽が「今のようなきれいな気持で、すなおにりっぱに育ってください」と発言している。この記事からも分るように、朝日の良識とでも言えるものがこの雑誌の特徴であって、一月一五日号の東大航空研究所の小川太一郎助教と航空朝日編集長斎藤寅郎に、国民学校六年生の男子四名を配しての座談会「成層圏飛行のお話」でも、ごく普通の科学読物である。せいぜい「日本からアメリカにゆく時は成層圏を飛んで、帰りは向かひ風にならないやうに低い所を飛んで来ればいいけれど、アメリカから来る時は低く飛んで来れば、すぐ日本のほうに発見されちゃいますからね。その点は日本の方がいいわけだ」という小川の発言がある程度である。当時、成層圏の軍事的利用が話題になっていて、海野十三の『大空魔艦』などの少年軍事科学小説がよく読まれていたほどだから、少くとも、私や級友たちは、全くもの足らなかつた。もっと、勇ましい記事や、空想科学小説が読みたかつたのである。

注

(1) 『週刊少国民』についての全面的な紹介ないし研究はない。ただし、同誌によくふれている労作に、山中恒『ボクラ少国民』(辺境社、一九七四年刊)をはじめとする、同氏の少国民シリーズ全五巻がある。このシリーズは、『週刊少国民』や『少年倶楽部』など、山中氏がかつて愛読した雑誌の読者論的部分がいたるところにあって、その部分と、戦後に公表ないし公刊された資料とが、たくみに組合わされていて、彼の戦時中の読書体験、つまり生きた読書と、現在、資料として読むという死んだ読書とが、きちんと区別されていて、本稿を書くのに多大の参考になった。なお、桜本富雄『少国民は忘れない』(マルジュ社、一九八二年刊)は、『週刊少国民』に掲載されていた詩を多数紹介、批評している。

(三) 「山本元帥の仇をうて」——一九四三年度

開戦後一年をすぎ、一九四三年(昭和一八年)に入ってから、連合国の反撃がはじまった。新年特別号の表紙は小磯良平の「強い少国民」という題で、農村の少年少女をえがいている。中のカラー頁は「少年兵双六」である。説明文によると「少年兵双六は少年が入学試験を通過して、それぞれの学校で教育を受けて、一人前の下士官として戦線に活躍するまでをゲームにしたものである。ここでの「少年兵」とは陸軍少年兵で、陸軍航空学校は国民学校初等科修了程度、他は高等科修了程度で入校できる。

「世界の人々を驚嘆させている大東亜戦争の赫々たる戦果の

一五年戦争末期の雑誌(一)



1944年新年特別号



1944年8月13日号



1944年3月5日号

蔭には、陸海軍の少年兵出身の若き勇士の一際目覚しい活躍がある。

今や皇軍の華として、大きな期待をかけられている少年兵生徒の制度の起りは、これからの戦争の方法が科学戦であり、機械化戦であるとまでいわれる程複雑となり、兵器や戦術が非常に発達して来たので、機械化部隊の優秀な兵器を十分に使いこなして、完全にその能力を発揮するためです。今迄の様な短期間の入営だけではとても訓練されるものでない、そこで少年時代からみっちり教え込んでゆかうというのである。

それでは、少年兵生徒は、どんなものであるかというところ、海軍には少年飛行兵があり、陸軍には、少年飛行兵、少年戦車兵、少年通信兵、少年砲兵、少年防空兵、少年兵技兵がある。

双六の「振り出し」の五人の少年は、中学生ではない。国民学校高等科の少年だ。戦車、大砲、飛行機のモデルを持ったたり、防

毒マスクやイヤホーンを頭にかぶっている。次のコマは、内務班の生活、教室での授業、演習、そして「上り」が実戦なのである。いよいよ、戦争は「大人」が戦うものではなく、子どもも巻きこむようになった。

とはいえ、この時期は、まだまだ、少年兵キャンペーンも、ひかえめであった。二月二八日号は「アメリカの少國民を語る」と題して、交換船浅間丸で帰国した坂西志保、三井高維と六人の國民学校生徒に「アメリカ少國民の生活」を語らせた。まず、大統領に会ってもおじぎをしない、授業中にリンゴを食べる、学校は土曜、日曜と休みで、しかも宿題がない、通学、遠足はバスに乗る、小学生でも選挙のことを話題にし、自動車の運転、ラジオの組立ができる。「とにかくアメリカ人はアメリカを世界で一番いい国だと考えている」といった発言が続き、「アメリカには孝行という言葉がありません」と続く。私は、毎朝の朝礼で校長の忠孝論の長演説にうんざりしていて、「私にピストルがあれば、校長を狙撃するのになあ」という妄想で頭が支配されていたものだから、「アメリカの少國民」生活をうらやましく思った。リンゴのことは、別の本で知っていて、なぜ日本でもリンゴをくばらないのだろうと考えていた。編集部もこれはまずいと考えたのだろう。この座談会記事の横に、木村栄(帝國學士院會員)の「幸福な諸君」というお説教記事を掲載している。

少年の皆さん、あなた方は最も幸福な人たちであると私は思

う。しかしそういうと、こんな戦争最中で物資も不足し、万事不自由がちに何が仕合かといわれる人もあるでしょう。なるほどあなた方の赤ちゃん時代に比べればそうもいえるでしょうが、私はそれを狭い個人的な考え方と思う。

第一あなた方は世界に類なき、かつ最も健全な皇道精神の上に立つ大日本に生まれられたことが第一の幸福です。(中略)また一方から申せば、あなた方が一番働き甲斐のあるときにあわれた人たちであります。この点われわれ老人どもの最も羨ましいことです。

これが私の申すあなた方が最も幸福な人たちだというわけです。(以下略)

当時、パール・ハーバーの特殊潜航艇の九軍神が大話題となっていて、岩田豊雄の小説「海軍」が「断じて行えば、鬼神も亦避く」の精神主義を宣伝していた。ちょうどその頃、私の國民学校では、「九軍神というけれど、海軍兵学校出身の士官四名と下士官五名が、いまだ帰らざる特殊潜航艇五隻」に乗組んでいたというのでは、勘定が合わない。士官が一人、捕虜になったのではないか」という噂が静かに、しかし急速に流布されていて、『週刊少國民』十一月五日号に掲載された技術院参技官清水勲二の「油断ならぬ米国の軍需品生産力」という論文が強調していた「精神力だけでは勝てぬ」という説と交錯して、私たち「少國民」を考えこませたのであった。

続いて四月四日号は、巻頭に京都学派の高山岩男の「靖国の神とならむ」がでる。

「神たる護国の英霊 天照大神の御子孫にまします万世一系の天皇は現人神として君臨遊ばされ、我が国は神代から伝わるそのままの神国です。この神国の基礎を揺がすような悪い人間や悪い国が現れるとき、我々は蹶然起つて戦い、これを撃滅しなければなりません。これによって我々は神々が世界を作り歴史を作り給うた御心に適い、神々の世界創造の業をお助けすることができるのであります。而もこれが天皇陛下の御命令を奉じ、天皇陛下のために命を棄てることによってできるのです。このとき我々は世界を創造した神々と共にあり、我々もまた神として祀られるのであります。護国の英霊が靖国の神となる深い意味はここにあるのです。

こんな、むつかしく、何の面白味もない説教では、「少国民」も戦争をみかざるだろう。少くとも私は、がっかりした。そこで、編集部も考慮したのでらう。四月二五日号の第一頁に「準備あり、ニューヨーク大爆撃・力強いわが自信・佐藤陸軍省軍務局長の口演」という景気のいい文章を掲載している。

大東亜戦争、いや枢軸と、反枢軸の戦いは今までのように途中で仲なおりをするような戦争ではない。われらは「日本人を

一五年戦争末期の雑誌(一)

地球上から根絶しする」などといっているアメリカを攻めて攻めてワシントンまで攻め、イギリスはロンドンまで攻めて彼らに白旗をかかげさせねばやめぬ強い決心をもたなければならぬ。その方法はドイツ、イタリヤと手を握り合つて非常に優れた航空機とある強い手段で一度にたたきつけることだ。非常に多くの飛行機や強力な爆弾、その他敵をたたくいろいろな武器や手段で二度と立ち上れないくらい強烈にやっつけるのである。ニューヨークの何万人もの人が住んでいる有名な摩天楼を片ぱしから爆撃し、ワシントンを焼野原にしてしまうことである。それは西南太平洋で、アリューシャンで散々たたかれながらも、彼らは決して日本に敗けたとは思わず、何とかかかとか理窟をつけて自分を慰め、世界をじまかそうとしている。金持で生産力のずっと優れた自分らが貧乏な日本に敗ける道理がないとうぬぼれている。敵米英をそこまで、撃つてやらねば日本への侮りを捨てないからだ。この企てを実際遠からず実現できる準備がわが国であらゆる方面に着々とできている。

私は、当時この記事を胸をときめかして読みはじめたものの、なんら具体性のないことに気付いて、がっかりした記憶がある。そうこうしているうちに、主戦場はソロモン群島に移り、山本五十六が機上で戦死し、国葬がいとなまれた。アッツ島守備隊が玉砕した。私は子供心に、「もう日本は攻勢がとれなくなつたのだ」と考えるようになった。ガダルカナルの報道の「敵は物量、

我は大和魂」という記事に、心細くなってきた。私は山本五十六の国葬の時の「綴方教室」の豊田正子の文章をひさしぶりに読んで、同感であった。五月三〇日号である。彼女は、国葬を情景を描写したあと、こう書いている。

山本司令長官が御戦死なさるなど私達は、夢にも考えたことがあるでしょうか。あの小さな白い箱が、山本司令長官のお姿なのでしょうか。私は一しゅんの間に、私達の前を通り過ぎて行った御遺骨のお車が、本当のこととは信じられない気持ちでした。沿道の人々に静かに会釈をしていられる御遺族の車が過ぎたあと、出迎への大臣方の車があとからあとから続いて行きました。／私達国民は、山本司令長官がお元気で凱旋なさって、宮内省さしまはしの自動車か馬車に乗られて、晴れの参内をするお姿をどんなにお待ちしていたことでしょう。私の目の前には参内する時の元帥のお姿がちらついて、自動車の中の白い箱が、とても本当とは思われませんでした。

こういう文章と、巻頭の土井晩翠の「ああ山本元帥」という長詩を読みくらべて、「荒城の月」の土井晩翠に私は絶望した。最後の節だけを、書き抜いておこう。

神武神聖の皇統を／うけつぐ二百二十四代／天皇陛下かしこくも／聯合艦隊司令長官／海軍大将山本五十六／多年にわたり尽

くしたる／偉大な功を嘉せられ／功一級大勲位／賜はる無上のほまれ見よ。

この詩よりも、豊田正子の方が、さすが生活綴方だなあと、私は感心した。感心したが、こういう作文を学校に提出しようとは考えなかった。担任の教師にしかられるだろうと考えた。作文は私の得意な科目だったから、教師のよろこびそうな名文句を考えつけて、「米英の子供に負けるものか」というのを考えついた当時、「撃ちてしまむ」というのがあちこちに掲示されていたが、これよりは自分の考案した方が子供むきでいいのにと、ひそかな自信作であった。山本五十六の国葬のあと、町のあちこちに「山本元帥の仇をうて!」、「山本帥の後に続け」と赤のペンキで書かれはじめた。前者はいいけれど、後者は、「山本元帥の後に続け」たら、国民は死んでしまうことになるのにと、子ども心に合点がゆかなかった。

翌四四年(昭和一九年)四月に、私は縁故疎開で兵庫県西部のTという城下町に疎開したら、一年前に書かれたであろう「山本元帥の仇をうて」の看板があちこちに見られ、もう赤ペンキがはげかけていて、いたって不景気な光景であった。

少年兵徴募キャンペーンもさかんになり、『週刊少国民』も、陸軍少年飛行学校や予科練の訪問記を毎号のように掲載するようになる。例によって、戦時中の流行作家岩田豊雄の「予科練、うれしいこと、悲しいこと、一等飛行兵拜命、はじめて軍服をつけ

た時の感激と共に「一生忘れられぬ」がでてゐる。同じ頃、文科系大学生は徴兵猶予廃止で、入營・入団した。『週刊少国民』は次のようにうたい上げた。「僕たちの兄さんは壮烈な決意をまなじりに浮かべて日の丸のたすきをかけて、大空の決戦場へ出陣する。『天皇陛下の御為に誓って一身をささげます』ああ、兄さんたちのこの決意に、僕たちはじっとしていられない。友達は大ぜい陸や海の若鷺を志願して、ぞくぞく大空への道を駆けている。ああ来年が待ちとおしい。来年の十月には満十四歳になって、きつと少年飛行兵学校の校門をくぐる覚悟だ」。

こうしたアジテーションに対応して、高村光太郎は「ぼくも飛ぶ」を書いた。

空からぼくをよんでゐる／あの音がぼくをよぶ。／今朝も目がさめると、／まだうす暗いすずしい空を／もうあの爆音が気もちよく／遠くの方からひびいて来て／まるでぼくの家を知っているやうに／すぐ尾根の上を通っていった。／あの音はぼくをよぶ／あの音をきくとぼくの胸がふるえる、／大東亜をまもり／敵機を端からたたき落し／御先祖さまや、神さまに／それを見ていただくのはいいな。／ぼくも飛ぶ。／あの音がぼくをよぶ。／お父さん、お母さん、今年こそ／ぼくを少年飛行兵にしてくだされ。／

こういう煽動詩を書いた高村光太郎を私にくむ。大木純夫が、

一五年戦争末期の雑誌(一)

いくら戦争詩を書こうが、それが自分の感慨をのべているかぎりには、まだ許せる。しかし、なにも分らぬ児童に「ぼくを少年飛行兵にしてください」とは、なんとということか。同じように、巽聖歌が「あの空」(『飛行少年』一九四三年二月号)で、「行きたいな、あの空／飛びたいな、雲の上／ぼくたちを待ってゐる空／南方につづくあの空。」と書いたことも、同じように責任を担ってほしいのである。

注

(一) 戦時下の児童文学者の戦争犯罪についての告発とそれについての議論はおどろくほど多い。口火を切ったのは佐々木守「児童文学における近代性への疑問・児童文学者の戦争戦後責任」(『小さい仲間』二六号、一九五七年三月一日刊所収)、つづいて同氏の「痛い、痛い、痛いばら」とげ小川未明「野ばら」について(『小さい仲間』二七号、一九五七年四月一日刊所収)がある。このほか、関英雄「第一次『日本児童文学』と戦後問題」(『日本児童文学』一九六九年五月号所収)が参考になる。

(二) 「いまこそ起て、真の決戦だ」——一九四四年度

この年は、用紙不足で『週刊少国民』は従来のB4版が四月九日号で終り、四月一六日から、半分のB5版になる。三月二六日号(第三卷一二号)から、表紙に「時局雑誌」と書かれ、表紙もすべて兵士もしくは、生産に従事する「少国民」になる。このボタンが、敗戦時まで続くのである。



この年は、まず、青少年の総動員だが、戦局としては、六月のサイパン来襲、マリアナ沖海戦、そしてサイパン島陥落とつづくのである。ようやく、日米「決戦」の秋がきたのであった。「決戦」という言葉は、開戦いらい何度も使われ、開戦時の「大東亜戦争の歌」でも「起つやたちまち撃滅の、勝どき上る太平洋」のうたい出しで、最後のフレーズが「いま決戦の時きたる」であったが、いよいよ、「決戦」の時がきて、日本は無残に敗北を喫したのであった。それがマリアナ海戦である。「週刊少国民」の巻頭論文「少国民決戦日記」は、見出しに大きく「今こそ起て、真の決戦だ、サイパン島へ聯合艦隊一部出動」とうたい、次のように書いた。

今までも何回となく、決戦だ、決戦だといわれましたが、いよいよひしひしと重大な時が迫って来ました。わが内南洋を守る大切な根拠地、占領地と本土との交通路を守る要地、また東京の玄関口であるサイパン島をおそった敵は、六月十五日その南方面から上陸を始めました。兵力はおよそ二箇師団に達するといわれますが、わが守備部隊はこれに猛烈な攻撃を与えて大きな損害を出しています。

一方、十九日マリアナ諸島西方の洋上に出て来た三群からなる敵機動部隊は、わが聯合艦隊の一部に捕捉されてはげしい攻撃をうけ、航空母艦五、戦艦一以上を撃沈破され、また飛行機百以上を撃墜されました。戦闘は同日の午後から二十日に及び

ましたが、遂に敵に徹底的打撃を与えることはできませんでしたが、我々は油断なく敵の出方に注意しなければなりません。なおこの戦闘でわが方も航空母艦一隻と付属の油槽船二隻、飛行機五〇機を失いました。

これは「大本営発表」を書きなおしたもので、敵機動部隊は「航空母艦五、戦艦一以上を撃沈破され」というのは大ウソで、逆に、日本の航空母艦は三隻が沈み、塔載機のほとんどが、アメリカ側のいう「マリアナの七面鳥うち」で撃墜されてしまった。当時、私はこの文章の「敵に徹底的打撃を与えることができませんでした」を読んで、「決戦に負けたのだろうか」と不安の念をいだいたものである。

サイパン島の失墜で、大都市への空襲必至となり、一般家庭の疎開の強化と学童集団疎開が急がれることになった。「週刊少国民」七月二三日号は、さっそく、三好達治の詩「僕らは疎開する」を掲載する。

けふ僕らはなつかしい家庭を去る／けふ僕らはなつかしい母校を去る／けふ僕らはなつかしい東京の町を去る／僕らは先生に別れ友達に別れ／父にも母にも兄弟にも／けふ僕らは遠く別れて出発する／僕らは汽車にのってけふは遠く疎開に旅立つ／この出発に／僕らの心はいかに痛み／僕らの心はいかにふるへをののか／けれど僕らはよく心をきめ／かたく心をいまし

め／一切を雄々しく忍耐して／僕は元氣に出発する／僕は遠く疎開して僕らの知らない田舎に行く／かうして僕らは山林や田野や海浜に行く／かうして僕らは日本中の到るところに散らばっていく／やがてはその大切な運命を僕らの肩になふために／僕は遠く日本中の山野にちらばっていく／けふ僕らは祖国の少年／祖国のけふの決戦にあつかり得ない小さな国民／僕は疎開する／さらば僕は元氣に出発する／僕は祖国の遠い将来にかかつて元氣に出発する！

私はすでに縁故疎開していたが、生活習慣がちがいが田舎町で不幸であった。けつして「僕は祖国の遠い将来にむかつて元氣に出発する」というものではなかつたのである。

ところで、それから数年して、新制高校生になつた頃、岩波文庫で『中野重治詩集』に収録されている「雨の降る品川駅」（一九二九年発表）を読んだら、いつかこれに似た詩を読んだことがあるとおもつた。記憶の底をまさぐつたあげく、ようやくおもひ出したのが、この三好達治の「僕は疎開する」だつた。いま、中野重治の詩を書きうつしても、調子がどこか似ていると思えるのである。中野重治の詩の一部分をうつしておこう。

辛よ さようなら／金よ さようなら／君らは雨の降る品川駅  
から乗車する

李よ さようなら／も一人の李よ さようなら／君らは君らの

父母の国にかえる

君らの国の河はさむい冬に凍る／君らの叛逆する心はわかれの  
一瞬に凍る

君らは乗りこむ

シグナルは色をかえる／君らは乗りこむ  
君らは出発する／君らは去る

さようなら 辛／さようなら 金／さようなら 李／さようなら

ら 女の李

行つてあのかたい 厚い なめらかな氷をたたきわれ／ながく  
堰かれていた氷をしてほとばらしめよ／日本プロレタリアー  
トの後だて前だて／さようなら／報復の歡喜に泣きわらう日ま  
で

いまにして思うと、一九四四年に読んだ三好達治の詩を、一九五〇年頃まで覚えていたのだから、疎開して小さな城下町ですごしてはいた私は、さびしくて、三好達治の詩を何度も読んだのであろう。そんなことは、すっかり忘れていたが、この稿を書くために『週刊少国民』のバックナンバーを読んでいて想ひ出したのである。この一事だけでも、読者論を書くことがいかにむづかしいかが分る。

ところで、城下町の私は、かつての軍艦の知識を話し合う友もなく、『海と空』はあいかわらず購読していたものの、一緒に読む友もなかった。そうした時、『週刊少国民』一〇月一五日号に掲載された門田圭三「昔の海戦といまの海戦」に、目のうろこが落ちるほどのショックをおぼえたのである。これは、現代の海戦は、空母中心の機動艦隊同志の戦いだというものであった。私は平田晋策の『我等若し戦はば』や『昭和遊撃隊』で主張されていた日米両艦隊の決戦の大海戦がおこると信じていたのである。ところが、門田はこう主張する。「今でも艦隊の主力は戦艦であり、戦艦の遭遇戦がなければほんとうの海戦でないやうに思っている人がありますがこれは大変な間違いです。こういう文章は「海軍雑誌」と銘打った『海と空』にも見当らず、あいかわらず深谷甫主幹の戦艦論が主流だったのである。

この門田圭三の文章を、当時、私は何度も読んだから、少し長いですが、主要部分を引用しておこう。

大東亜戦争になってからは日本海海戦のやうに戦艦同士が大砲を撃ちあふ海戦は一度もないといっているのです。敵はアメリカの太平洋艦隊は、サイパンに攻めよせ、さらに西に進んでバラオ、フィリピン方面にまで出てきてゐます。この敵艦隊をわが聯合艦隊がやっつけるのはいつか。誰でもその日を楽しみにし、またその戦ひで勝つことを祈ってゐないものはないでせう。しかし、近いうちに起ると思はれる日米大海戦も、果して

日本海海戦のやうに敵味方の戦艦が近よって大砲を射ちあふやうな海戦となるでせうか。恐らく戦艦同士の戦闘は起らないであらうとみるのが正しいと思ひます。

今まで艦隊といへばすぐ戦艦を思ひ出し、陸奥、長門の堂々たる姿を思ひうかべてゐたのですが、大東亜戦争後では艦隊の主力は戦艦ではなくなつたのです。艦隊の中心は航空母艦です。敵の艦隊陣の中へ飛びこんでいってこれを沈めるのは、航空母艦から飛び立って行く飛行機です。昔は戦艦が艦隊の中心であり、その主砲が敵をやっつける一番主な兵器であつたのに対して今は航空母艦が艦隊の中心で、その艦載飛行機で爆弾を抱き、あるひは魚雷をかかへて敵艦隊をやっつけるのです。今でも艦隊の主力が戦艦であり、戦艦の遭遇戦がなければほんたうの海戦でないやうに思つてゐる人がありますがこれは大変な間違いです。

も一つ新しいことは、陸上の飛行場——基地といひます——から飛び立つ飛行機——基地航空機——も、新しい海戦では、艦隊の大切な一部分であるといふことです。たとへばマライ半島海戦ですが、あの海戦で敵イギリスの東洋艦隊をやつつけたのは、わが基地航空機でした。このやうに、基地から飛び出して行く飛行機も、わが聯合艦隊の一部とみていいのです。

ですからこれからの新しい海戦では空母の飛行機と、基地の飛行機をどういふあんばいに使ひこなして、敵艦隊と、敵飛行機をやっつけるか、そこに艦隊司令長官の苦心があるのです。

(中略)

日本海海戦では五千メートルくらゐ相距てて海戦が行はれたのですが、今の海戦ではこのやうに飛行機が敵を襲撃して帰つてこられる距離をへだてて行はれるのですから、お互に軍艦の姿は全然みえないのです。

かうして基地航空機と母艦の飛行機とが力をあはせて敵艦隊をやっつけるとともに、潜水艦もまた敵艦に近づいて魚雷攻撃をやりまゝす。この勝敗がきまるのは、敵と味方の飛行機が、どちらが優勢で、どちらが強いかによるのです。ことに飛行機が一機でも多い方が戦ひに勝つのに有利です。

ですからあの冒い敵の太平洋艦隊を全部撃滅して勝利をうるためには、飛行機が一機でも多くできるとともに、一人でも多く荒鷲勇士になつてもらふことです。

この門田論文のあと、大本営は台湾沖航空戦で、敵の空母一隻、戦艦二隻を撃沈したと発表し、ラジオからひさしぶりに軍艦マーチが流れたが、町でも学校でも、さしたる興奮はみられなかった。沈めても、沈めても現われるアメリカの空母に、日本人は恐怖したのである。

しかも、このあと、アメリカ軍がフィリピンに來襲し、「レイテは天王山」と言われると、私は「あれ、アメリカの第五八機動部隊は、台湾沖で壊滅したのではなかったか」と不思議に思った。しかも、レイテで神風特攻隊が出撃し、そのすさまじさに、私は

一五年戦争末期の雑誌(一)

身ぶるいし、いったい、この戦争が終つたときには、私は死んでいるのではなからうかという疑いの念が頭をもたげてきたのであった。

その頃の『週刊少国民』は、集団疎開児むけの記事を多く掲載していた。健康については東大医学部教授緒方富雄がよく書いていた。同じ頃、文部大臣二宮治重が「寮は小さな軍隊です」を寄稿していた。(二月三日号)当時、私は読んだだけだが、集団疎開に行った友人は、暗記するほど読まされたそうである。

寮は小さな軍隊です 文部大臣 二宮治重

(前略) 前線の兵隊さんをはじめ全国民はいまや火の玉になつて戦つてゐるのですが、皆さんも一億国民中の幾十万人人として力いっぱい戦はねばなりません。その戦ひ方こそは、強い心身を作り元気にみちてみちてこの疎開生活を果しきることにつきますのです。りっぱな疎開生活を送ること、そのことが皆さんの必勝態勢なのです。

りっぱな疎開生活とはただ行儀をよくして、よく勉強すればいいといふだけではありません。この土地を第二の故郷と思ひ、それぞれの風土、伝統のなかにとけこんで山川を先生とし、風や雪を友だちとして、たくましく元氣潑刺とした少国民になることが大切なのです。都会にはない清らかな空氣、美しい自然を存分に吸ひこんで新しく生まれかへた氣持で勉強することです。疎開を都會の学校の分教場や林間学校のやうに考へるの

は大きな間違ひで、この際にこそ皆さんの兄さんや姉さん方のできなかった新しい生活をきづきあげねばなりません。

疎開学寮はひとつの大きな家庭です。道場です。塾です。小さな軍隊です。皆さんはこの時代、この生活に恵まれたことを誇りとし、りっぱに後世に残る疎開生活を打ちたてて下さい。

艱難汝を玉にすといふ言葉がありますが、辛いこと苦しいことに打ち勝つてはじめて人は大きく育つのです。いま日本人は大きな苦しみを乗りこえて育たうとしてゐます。皆さんも一人の中の一人としてどうかしっかりがんばって下さい。

当時、私はこの文章を読みながら、私と同じ城下町の寺にいた集団疎開の国民学校の生徒を考えた。彼らは、寺の本堂で生活していたが、めったに町を歩くこともなく、本堂の縁側にじっと座っていた。私の通学している国民学校には一度だけあらわれた。三〇〇人ほどいたのだろうか。彼らと地元の生徒たちが運動場に整列し、放送のために「予科練の歌」をしょに歌った。テープ・レコーダーがなかった時代だから、何度もリハーサルをくりかえした。それで、この出来事をよくおぼえているのである。司会のアナウンサー(当時は放送員と呼んではずである)が、「ここT町の国民学校の校庭には、神戸から疎開した神戸市東須摩国民学校の少国民と、地元のT町国民学校の少国民とが、必勝の誓いをかわしたあと、「予科練の歌」を斎唱します」とさげんで、私たちは「若い血潮の予科練の、七つボタンは桜にいかり」と歌った。

歌いながら、私は「放送なんていいかげんなものだなあ」と考えた。わが町に来た集団疎開の生徒と集団で会ったのは、これが最初で、最後であった。青白い顔をして生気なくのろのろと歩いていた集団疎開の生徒たちのことを、いまもときどき想い出す。私が疎開する前にいた神戸の国民学校のクラスメートは、鳥取県の村に集団疎開して、村の学校に通ったのだという。戦後三年目に、有志がその村を訪問して、「よくおぼえてくれていた」と歓迎されたそうだが、あの東須摩国民学校の生徒たちはどうだろうか。空腹をこらえて寺の本堂で、『週刊少国民』の文部大臣の訓示を読まされたであろう少年たちが、三三年後にT町を訪れてみようと考えただろうかと私は暗い気持ちになるのである。

ところで、一九四四年の一〇月から翌年六月まで、私は『週刊少国民』に連載されていた木村莊十の「天外魔域」を愛読していた。私は戦争が始ったあと、近所の家から古い『少年倶楽部』を借りて、南洋一郎、山中峯太郎、平田晋策などの冒険軍事小説を熱読していた。疎開して、そういう古い雑誌や単行本が周囲から消えたときに「天外魔域」がはじまったのである。

この小説は、日本の科学者がドイツの航空研究所で成層圏を飛ぶ百人乗りの巨大ジェット爆撃機を設計し、ドイツの軍事技術の総力をあげて試作機を組立てる。乗組員として早くから日本兵が待機していて、日本に飛び帰る話である。ベルリンを離陸したあと、研究所の工場は連合国の爆撃で破壊されて、もう

ドイツ用の機は作れなくなる。ベルリンをはなれて、フランス海岸で、連合軍のノルマンジー上陸を新型爆撃で妨害し、ついでにロンドンでエンジンを火の海にして日本にむかう。ところが、タクラマカン砂漠でエンジンが不調となり、妙な盆地に不地着する。そこで、さまざまな冒険を経験し、石油の産地を発見して、硫黄島にアメリカ軍が上陸したいま、祖国の危機をすくうために、祖国にむかって飛立つのである——。

こうしたSFまがいの軍事冒険小説は、ひさしぶりであった。いや、正確に言うとうと、ちよとど、この年（一九四四年）五月に、大日本雄弁会講談社から創刊された少年兵募集を目的とする『海軍』という雑誌に、海野十三の『宇宙戦隊』というSF小説が連載されはじめて、私は少年兵になるつもりはなかったが、軍事知識を知りたかったのと、小説のために『海軍』と『若桜』を定期講読していたのである。「天外魔城」と『宇宙戦隊』だけが、当時の私にとってのエンターテインメントであった。

一九四四年は、本稿で紹介した一九三八年の内務省通達が実質上は無視された時期であった。この年のはじめに、朝日新聞社は少国民のための懸賞冒険小説を募集していたし、前述の『天外魔城』、『宇宙戦隊』もこの年に発表されたし、この種の単行本も何冊か刊行された。内務省の通達を守っていたのでは、「少国民」は離れて行くばかりだということが、情報局、軍部そして出版社にも分ってきたのである。

#### 四 勝ち抜く僕等少国民——一九四五年度

一九四五年の正月、私の国民学校では、学校防衛隊を組織し、六年生男子は夜中といえども、警戒警報、空襲警報のサイレンが鳴れば学校にかけつけねばならなくなった。

『週刊少国民』の新年号の巻頭論文「おめでとう昭和二十年」は「朗らかに『おめでたう』の御挨拶を交換して下さい。しかしそれだけではいけません。『おめでたう』の後につづいて、『今年はどうなことがあっても必ず米英を撃滅してみせる』という必勝の誓いを新にする必要があります。それでこそ昭和二十年のお正月を迎える意義があるといふものです」と書いた。この新年号には柳田国男の「母の手まり唄——疎開の人たちのために」という長い文章が掲載されていた。いま読むと柳田民俗学の話で興味深い、なにしろ戦時下である。のんきな手まり唄の話など、私には全く関心がなくて、冒頭だけ読んで、すぐ「天外魔城」の頁をくつた。戦争の最後の年の正月号に柳田国男の子どもむけ論文とは、いかにも朝日の「良識」をおもわせるけれども、当時の子どもは、この高尚な論文を読んだらうか。少くとも私の友人は一人も読んではいなかった。こうしたところにも、読者論構築の必要があるのである。それはさておき、一月一四日号には、皇后の「疎開児童に賜りたる御歌」の解説が掲載された。「御歌」とは「疎開児童のうへを思ひて、つぎの世を／せおふべき身を／たくましく／たたくひよ／さとにうつりて」である。



1945年7月22日号



1945年9月2日・9日号



1945年10月14日・21日号



1945年8月5日・13日号



1945年9月30日・10月7日号



1945年11月11日・18日号

私は、城下町の県立中学の入試をうけるつもりだったから、ヤマをかけて、この歌を暗記し、解説文を何度も読んで、ついでに書いておくと、この年三月の入試は口頭試問と体育だけで、前者は半紙に「謹写」したこの歌を見せられて声をだして読み、作者とその意味を質問された。なお、口答試問の第二段は、次のとおりである。「サイパン島は東京の二、二〇〇キロ南にある。時速四〇〇キロのB二九は、朝九時にサイパンを出発し、東京上空に三〇分施回して帰路についた。B二九がサイパンに降りつくのは

何時か。皇后の「御歌」のヤマは当って、私は『週刊少国民』に感謝した。私のうしろの他の町出身の受験生は、「御歌」の作者を昭憲皇太后と答えて、歌の意味は答えられなかった。

さて、二月一八日号に、久しぶりに熱心に読んだ記事があった。「これからの軍艦、敵アメリカはかう考える」。防空戦艦、防空巡洋艦、そして飛行甲板を二重にした航空母艦。こういう空想の軍艦は以前『海と空』誌が公募していて、入選作を私は熱心に読み、疎開前には友人たちとよく議論したものであった。そうした楽しい思い出を反すうしながら、この頁を見入ったものである。一部を引用しておこう。(カラーの絵は省略する)。

戦艦——まづ戦艦についてみると、「火力攻撃艦」とでも名づけたいくらるに、全艦を強力な火炮で固めてゐる。すなはち十八インチ砲十五門をもつて一回の一斉射撃で、二十二トンの鉄量と火薬を時速一千八百マイルの速さで撃ちこむといふのである。その他甲板から吃水線にかけての形もまるで亀の甲のやうな物々しい装甲に改められてゐるのがわかる。説明によるとこの戦艦の性能と大きさは、排水量六万五千トン全長九百四十五フィート、幅百二十六フィート速力三十ノット。

航空母艦——航空母艦といふものは「動く飛行場」だから、飛行機を離艦着艦させれば、それでよいといふのは今までの考へ方で、今日の空母はたたくさんの予備機を持ってゐて、戦闘でうけた艦載機の損害をどしどし補充していく用意がなければい

けない。それで大量の飛行機を收容する広い格納庫を持つこと、いざ戦闘開始となったら最大限に離着艦の活動ができるやうに飛行甲板を二重にすること、それから敵の攻撃を防ぐ対空火器を強化することに重点をおいてゐる。図の空母は、排水量二万二千トン、全長七百五十フィート、幅九十五フィート、速力三十二ノット。

対空巡洋艦——これは今までになかった新しい艦種である。つまり巡洋艦、駆逐艦、航空母艦を一つにまとめたやうなもので、敵味方大艦隊同士の大規模な戦闘では大して役には立たさうもないが、上陸用軍隊輸送のための海上警備とか、小規模の戦闘などには便利な艦種とはいへよう。排水量一万二千トン、全長六百五十フィート、幅七十五フィート、速力三十五ノット。

アメリカ軍は二月に硫黄島に上陸、三月一〇日に東京が焼野原となり、続いて、名古屋、大阪、神戸が焼かれた。学校防衛隊の私は夜中でも防空頭巾をかぶって学校にかけつけた。職員室のラジオはつけっぱなしだったから、サイパン島からの中波の日本語諜略放送をもの珍しさから、よく聴いたものである。素人らしいアナウンサーが「日本はアメリカに勝てない」という意味のことをくりかえし語っていたが、その意味は私には理解できないことが多かった。いま思うと、「日本の軍閥」だとか、「自由な社会」、「民主主義」などと言っていたのだから、なにしろ、そういう単語は学校教育ではもちろんのこと、身のまわりでも耳にしたこ

とがないから、意味を把握し、理解することができなかったのである。

三月から毎晩のように空襲警報が鳴りひびき、近所の都市の爆撃にむかうB二九が、灯火をつけたままの大編隊で爆音をどろかせて頭上を通過するようになった。本土決戦のかけ声がかしましいが、私には、日本が勝てるとは、とうてい思えなかった。だが、負けるとも思はなかった。いや、正確に言えば、敗戦という具体的現実のイメージが私にはなかったのである。家にあった『主婦の友』一月号に「敗けたイタリヤ」という写真が何枚か掲載されていたが、用紙が悪く、印刷がぼけていて、何がうつつているのか分らなかつた。日本放送協会の三月の「国民合唱」の間は、川田正子の「勝ち抜く僕等少国民」という歌で、私はその悲愴なメロディが好きで、よく口ずさんでいた。

勝ちぬく僕等少国民（上村数馬作詩、橋本国彦作曲）

一  
勝ちぬく僕等少国民／天皇陛下の御為に／死ねと教へた父母の  
／赤い血潮を受けついて／心に決死の白禪／かけて勇んで突撃

二  
必勝祈願の朝詣／八幡さまの神前で／木刀振つて真剣に／敵を  
百千斬り斃す／力をつけて見せますと／今朝も祈りをこめて来  
た



三

僕等の身体に込めてある／弾丸は肉弾大和魂／不沈を誇る敵艦も／一発必中体当り／見事轟沈させて見る／飛行機くらいは何のその

四

今日増産の掃り道／みんなで摘んだ花束を／英靈室に供へたら  
／次は君等だわかつたか／しつかりやれよ頼んだと／胸にひびいた神の声

五

後に続くよ僕達が／君は海軍予科練に／僕は陸軍若鷲に／やがて大空飛び越へて／敵の本土の空高く／日の丸の旗立てるのだ

もうこの時期の私は、『週刊少国民』を熱心に読まなくなっていた。「勝たないけれど、負けないだろう」という私のあいまいな考えを解釈してくれるような文章が、見当らなかったのである。中学校の授業はほとんど停止されていて、たまにある漢文の授業で「子曰」など習うと、現実ばなれがして、身を入れる気持になれなかった。教室の大半は本土決戦部隊に占拠されていたが、その兵隊たるや四十近い大阪の老兵で、ヨレヨレのスフの軍服、足はワラジで、水筒がないので竹筒を背おい、銃剣は竹光で、鉄砲のかわりに棒をせおい、便所で会うと、「ぼん、手紙をポストに入れてくれへんか。大阪に嫁はんがいるんや。どないしてるんか、心配や」と、なんとも情ない兵であった。これでは、必勝の信念

などてくるはずがない。『週刊少国民』七月一日号に「敵は苦しい『本土決戦』、真の戦ひはこれからだ」という論説が掲載されていて、私は読んだ記憶があるが、「勝たないが、負けない」という私の考えを訂正してくれるような力はなかった。とりあえず、冒頭を引用しておこう。

「心づよい陸軍大臣のお言葉」

阿南陸軍大臣は去る臨時議会の席で「敵がもし本土上陸を企ててくれば、海上においては水中に葬り、陸上に迫れば海中へたたき落し、上陸してくればこれを一人残さず撃滅する。いまや本土の決戦準備は完璧である。」と満々たる自信を見せて説明され、沖繩の不利に続いて敵の本土上陸は必至と見られる戦局に滅敵必勝の力強い確信を示されました。おごる敵がたとへ幾百万幾千万本土へ攻め寄せてくるとも、われにはこれを殲滅させるだけの準備は十分あるといふお話です。敵の本土上陸に備へ結成された国民義勇隊、地下要塞の構築、制空部隊の整備、手ぐすね引いて待つ特攻隊勇士たち、すべてが敵の野望を水の泡のごとくにたたきつぶす力を持つて待ちかまへてゐるのです。そればかりでなく、われには無限に続く補給線があるのです。これまで皇軍を重ねて来た各戦線は、その苦戦の原因のひとつとして補給難が上げられてゐます。本土決戦にはこの心配は少しもありません。逆に敵はわが本土へ近づくとつれて補給線が長くなるのに悲鳴を上げ「太平洋戦ではどうしても欧州戦の三

倍の補給力を必要とするが、これはなかなか困難なことだ。」と告白してゐるほど補給に苦勞してゐるのです。このやうに立場が違つてくると敵が無理な補給を押し攻めることは一そう戦を苦しくすることに成り、それだけわが軍に有利な態勢が展開されるわけです。沖繩戦は、敵が多大な物量で島を取りまきわが軍の補給線を断ち切つてゐるので、やむなくここでも苦しい戦争を続けて来てをりますが、これだけ不利な立場にありながらも敵に大きな損害を与へ、自分の損害をかくしたがる敵側の発表だけでも敵の死傷者合計三万五千余で陸上最高指揮官、バックナーがわが猛砲撃で戦死するなどの痛い目にあひ、つひには沖繩戦をめぐつて敵将ニミッツを中心に責任のなすり合ひを演じてをります。これほどの打撃を敵に与へた皇軍將兵の勇戦敢闘に深く感謝するとともに、敵本土へ土足をかけてくれれば一瞬にして、これを海中に葬り去る固い決意を新たにしなければなりません。

七月一五日号は、「必ず勝つ本土決戦」という長文の論文が掲載されているが、当時の私は、「本当に勝つのかしら」と読んでみたが、勝つとは書いてないのである。結論部分だけを引用しておこう。

勿論敵も上陸地点には航空機の猛烈な爆撃を行つたり、一隻で三個師団の砲兵と同様な威力をもつといはれる戦艦や、巡洋

艦などを海岸に近接させて艦砲射撃を加へ、わが防禦力を破壊しようとするでせう。したがつて本土上陸作戦は今までにない激しい戦ひとなるでせう。

これを簡単にいひ直すと、わが索敵機は先づ洋上遠く敵機動部隊や輸送船団を捕へて第一撃を加へます。繰返し加へる攻撃の下に海岸に近づいて来るものは、輸送船団から上陸用舟艇へ移り、波打際まで進んで来る間の行動が不自由なうちに撃砕します。それも運よく免れて上陸して来るものはわが陸上部隊の攻撃によつて撃滅します。

本土決戦はマリアナ諸島や硫黄島や沖繩島と違ひ、わが守備部隊兵員器材が不足すればいつでも十分に補給出来るところの差があります。

敵は数十万の兵力を日本本土上陸作戦に使用すると言つてゐますが、それが全部一度に上陸して来ることは出来ません。多くの船団によつて次々に来るのですから、上陸を企てたものから順に全滅させていくだけです。

さうした激しい戦ひが、繰返されるので、航空機や大砲などの兵器が十分なければなりません。また海岸線の要塞も十分堅固に築かれねばなりません。そこに航空機の増産は勿論、その燃料になる甘藷の増産も必要です。いざといふ時の第一線の後方勤務に必要な国民義勇隊も組織されるわけです。

敵は日本本土へ上陸して東京を占領するのだといつてゐますが、この思ひ上つた敵の企てをうち砕いて、神州を護り抜くのが、

一五年戦争末期の雑誌(一)

が、われら一億のつとめです。本土は断じて護り抜きます。

こうしているうちに、広島、長崎への「新型爆弾」の投下、ソ連の参戦と続いて、『週刊少国民』八月五日・一二日合併号の巻頭論文が「今こそそのり出せ新食物の発見に」。冒頭が「初めてたこを食った人は勇敢だったと思はないかね」、＃いやあ、たこよ、＃いなま、こを食った人のほうが勇敢だったと思ふな。これが＃闘ふ僕ら＃という題名の論説である。なにかおかしい。これを私が読んだのが、たぶん八月一〇日前後で、一五日に敗戦をむかえた。私は『週刊少国民』のおかげで「何かおかしい」というかたちで終戦を予知できたことを、いまも自慢にもっている。もちろん、「敗戦」は予知できなかったが、「戦争は終るのではないか」とうだけでも充分ではないか。

八月一五日の「玉音」放送のあと、私たち中学一年生は四、五人で「戦争のない日々とはどんなものか」と議論しあったが、誰も答えることができなかった。一九三二年生れ、つまり一五年戦争の勃発の翌年に生まれた私たちは、平和の日々を想像することができなかったのである。

しかし、戦争のない日常は、すぐになれてしまっ、もう勤労動員がないだけでうれしく、二三日すぎにはあれほど怖かった軍事教練の教官が離校に際して、「これからはワシントンヤリンカーンが偉いと習うだろうが、楠正成のことを忘れないでくれ」と演説しても、私たちはせせら笑っていた。

九月一日の二学期の初日、学校に行ったら、多くの生徒がゲートルを捨て、背のうの代りに風呂敷を持っており、私もおそるおそるゲートルをといた。その時の私のショックが、いま風俗についての関心につながっている。

さて、『週刊少国民』だが、さしあたりは、表紙の変化を追うだけで充分ではないだろうか。

六月一七日号、農村で働くハチマキの少女たち。六月二四日号、自転車で郵便配達にはげむ少女。七月一日号、飛行服姿の少年航空兵(日本画)。七月八日号、日本刀をふりかざしてワラ束をきる少年たち。七月一五日号、爆撃機をロープで索引する国民学校生徒たち。七月二二日号、笑って手をあげて出発する若き特攻隊員たち。七月二九日号、双眼鏡を持つ少年監視哨員。八月五日・一二日合併号、疎開地の楽しい飯盒炊さんの少国民。九月二日・九日合併号、収穫した野菜を持つ少年、九月一六日・二三日合併号、黒い学童帽、半ズボンの男の子とスカートの子が手をつないで腕跡を登校する光景。九月三〇日・一〇月七日号、ジープの前に腰かけて談笑する二人のGI。一〇月二二日号、白いセーラー服のアメリカの二人の水兵とならんで笑っている日本の子供、一〇月二八日・十一月四日号、背に炭だわらをかたぐ和服の少年少女(日本画)、十一月一日・一八日号、アメリカ兵の肩ののって笑う日本の子供、十二月二日号農村で牛をひく二人の少年。「疎開の思ひ出」と説明あり。

一二月一六日号、鉄棒で遊ぶ少年。

九月一六日・二三日号には、「アメリカ兵気質を理解しませう。きのうの敵はけふの友」という記事がある。「アメリカ人は、ひと口にいふと陽気で愛嬌があつてのん気な国民です」と言い、他方では「あくまで『自分は日本人である』といふ自覚と誇りを忘れず、服装も態度もきちんと整へ、彼らに真の日本の姿を知らせ、日本をよく理解させるやうつとめて下さい。戦ひは終つたのです。『きのうの敵はけふの友』といふ大きな広い心根でアメリカ軍に接することは、進駐軍を迎へる一番大切なことであります」と言っている。その横には、「アメリカ陸軍の階級章」という図解があつて、私は、それを見て感しかつた。というのは、たしか一九四三年の同誌には、「日本陸海軍の階級章」の図解が掲載してあつたからである。

九月三〇日・十月七日号には「新日本をつくる少国民へ」と題して、次のテッセイがのつている。藤田嗣治「沢山の名作に親しむ」、中島健蔵「ひとりよがりは病氣」、羽仁説子「人まねせずに実行へ」、三谷十糸子「美しい日本を造ろう」

こうして、『週刊少国民』は、じよじよに、平和時のよそおひに変化した。十二月二日号は、多事多難の一九四五年の最後の月の号であつたが、その表紙裏に天皇の写真がでてゐる。その説明文。

一五年戦争末期の雑誌(一)

「天皇陛下下関西へ行幸、新しく御制定の御服を召されて。天皇陛下の御服は、終戦とともに陸軍式、海軍式の軍様式を廃されて、新たに写真のやうな御服を制定されました。新しい御服はこれまで大元帥陛下として召されたものとは全然ちがつた平和日本の将来を国民にお示しになる奥ゆかしい御服です。」

陛下には十一月十二日初めてこの御服を召されて関西へ行幸遊ばれました。」

こうして、一九四五年は終つた。と同時に、一九四三年五月一六日号から開始された長編連載漫画「ナマリン王城物語」(松下井知夫)も終つた。日本の二人の少年が、ナマリン王城の悪者の支配する国で闘うストーリーで、私は毎号、楽しみにして読んでいた。この漫画、敗戦の変化にたくみに対処して、めでたく一二月号で終つた。

× × ×  
一九四六年九月一五日・二二日号に、次の社告が掲載された。

「週刊少国民は次号から『こども朝日』と改め、毎月一日、十五日の二回発行。」

みじめな戦争に敗れ去つて一年余、新しい時代の光の中へよやく一歩を踏み出そうとしている日本の歴史と共に『週刊少国民』もまた次号から『こども朝日』と誌名を改めて、輝かし

一五年戦争末期の雑誌(一)

い船出をすることになりました。戦乱ちゅうは『少国民』の呼び名で、むやみに戦争へ戦争へと駆り立てられた日本の少年少女が、後いまなおあの時代の『少国民』であってはならないはずです。新しく生まれかわった日本の国を、これから背負うて立つ明朗快活な子供、世界の人々からほんとうに愛され、信頼される平和日本の子供……『こども朝日』はそうした少年少女のためにあらんかぎりの努力を捧げたいと、目下いろいろ苦心を重ねています。そこでまず次号は新生記念として、すばらしい内容の特別増大号(この号に限り定価二円)をみなさんの灯下へおくることにしました。

なお『週刊少国民』はこれまで用紙不足のためにやむなく隔週発行となっていました。用紙事情がよくなつたあかつきには、できるだけ早く本来の毎週発行にもどすことにし、次号からは当分のうち毎月一日、十五日の二回発行と、みなさんにとっては隔週発行よりずっと便利な方法にかえました。どうぞこれも御承知のうえ、いっそう御愛読くださいますよう、この機会にお願いする次第であります。

朝日新聞社

こうして『週刊少国民』は終つたのである。

〔後記〕本稿を書くための『週刊少国民』原本は、山中恒氏の蔵書と京都府立資料館所蔵本を利用した。山中氏のコレクション

ンには、一九四二年、四三年、四四年度分がほとんど揃っており、若干の欠号と一九四五年度分は京都府立資料館所蔵本(朝日新聞大阪本社寄贈)によつた。記して感謝する。

なお、次回は、大日本雄弁会講談社発行の『海軍』、『若桜』(一九四四年、四五年)を紹介する予定である。